

都議会厚生委員との懇談会（1月27日）報告

「都議会厚生委員との懇談会」開催 —放課後活動の大切さを伝えたい！

～角筈区民センターレクリエーションホールに50人が参加

「放課後連・東京」では1月27日、角筈区民センターにおいて、「都議会厚生委員との懇談会」を行いました。当日は、下記の議員の方々をご出席くださいました。「放課後連・東京」からは48人が参加しました。

野島善司様（都議会自由民主党）

くまき美奈子様（都議会民主党）

佐藤広典様（都議会民主党）

かち佳代子様（日本共産党都議会議員団）

西崎光子様（都議会生活者ネットワーク）

「放課後連・東京」では、障害者自立支援法が実施された2006年から、「訓練事業」「地域デイグループ事業」の継続・発展を求めて運動を展開してきました。「これからの障害者福祉は自立支援法の中に位置付ける」ということが都の方針になったため、都の独自施策である「訓練事業」「地域デイグループ事業」が縮小・廃止に至るのではと懸念されたからです。私たちの運動によって、既存のグループは引き続き補助金

が受けられることにはなりました。しかし、新規のグループは、「包括補助事業」（2007年度から実施）の一般事業では補助対象にならないという問題などが残されています。そこで、都に働きかけるだけでなく、都議会議員の方々にも放課後活動の大切さや私たちの思いを聞いていただこうと、今回の懇談会を行なうことになったものです。

最初に、次の4名の保護者・指導員が、子どもの成長・発達にとっての放課後活動の意味、活動を立ち上げて運営をしていく困難さなどについて報告しました。

●楢岡誠司さん（清瀬市・わかば学童クラブ）指導員

子どもたちの姿や、指導員が何を大切にしているのかななどを、スライド映写をしながら紹介しました。そして、「集団活動の中で、子どもたちは楽しく遊んだり、ぶつかり合ったりしながら、自分の気持ちを伝えられるようになったり、他人を思いやる力が育ったりする」と説明がありました。

放課後連・東京ニュース

《No. 80》2008年2月25日

障害児放課後グループ連絡会・東京
（放課後連・東京）

江東区扇橋3-3-7-2階 さくらんぼ子ども教室内
〒135-0011 TEL・FAX 03(5683)0871

●熊川葉子さん（小平市・ゆうやけ子どもクラブ）保護者

私の子どもは高校2年。幼い頃から他動で目が離せず、パニックが多かった。屋外での遊びが好きだが、何かあった時に他の子に危険が及ぶので、大きくなるにつれて朝や夕方だけの外出になった。

しかも、私と一緒にでは機嫌が悪くなり、家でパニックを起こし、暴れるようになった。それを止めようとして、私は2度骨折をした。そのため、精神安定剤を服用させるようにもなった。

だが、ゆうやけに入ってから、トランポリンや夏のプールなどの活動で精神的にも肉体的にも満足し、夜も寝られるようになり、パニックが減った。精神安定剤も減らすことができた。そのことで私だけでなく、子どもが週末暴れるごとに連れ歩いていた父も、無口だった兄も救われた。

ゆうやけに入ってから7年が経とうとする。職員にならぬ思いを伝えられるという信頼関係ができ、友だちとも過ごすことができるようになった。放課後活動は、大切な生活の場であり、発達保障の場だと思う。

●林まり子さん（府中市・オンリーワン）保護者

子どもは小学1年。土・日曜日や長期休暇を合わせると、学校外の生活は学校生活の時間に匹敵する。家庭でも学校でもない場、集団活動の中で体験したり、社会性を育んだりする訓練の場が必要。

私の子どもは、温かく接してくれるボランティアさんが大好き。親子ではこんな関係は持てないし、親が抱え続けるのはよくないと思う。子どもに人間らしい生活をさせてあげたい。人間らしく生きていく権利は同等にある。

職員としてオンリーワンに関わってもきた。市に対して「地域デイグループ」の補助金獲得をめざしていると、開設当初から訴え続けてきた。市は補助金申請のための協議を都としていなかったという問題もあった。だが、実績づくりが必要だということで、家賃を捻出して場所を構えたりする中、ようやく2007年11月に補助金交付の回答をもらった。ただし、決して十分な補助額ではないため、家賃の支払いにあてるのか、職員を採用して、その人件費にあてるのかなど、悩みは尽きない。

●佐野靖子さん（かつしか風の子クラブ）保護者

葛飾区水元で、親がボランティアさんを募って、10年前にグループを立ち上げた。現在5名の指導員が助けてくれている。

親は、わが子のためなので、どんなことをしてでも、楽しい豊かな毎日を過ごしてほしいと頑張るが、指導員がどうしてこんなに熱意をもってやってくれるのか。本当に感謝している。指導員には、働き続けてほしいし、人並みの生活を送ってほしいと思うが、月に

10万円弱の給料しか払えない。指導員はみんな、給料だけでは暮らしていけないため、土・日曜日に他のアルバイトをしている。

区の担当者からは、「どんなにお金を積んでも、こんなにすばらしい人たちは集められないですね」と言われたこともある。だが、いつまでもこの熱意と優しさに頼ってよいのか。ずっと10万円の給料でよいのか。親も頑張らなければいけないが、行政にも助けていただきたい。熱意ある指導員が、社会的に自立して、職業としてやっていける制度があったらと切に思う。

このあとで、議員の方々からも、感想やアドバイスをいただきました。

●野島善司氏：放課後活動は自立に向けての訓練。事業の必要性は了解している。法内事業への移行を果たしてほしい。だが、それでも抜け落ちるところがあるだろう。その場合は、事業の再構築で（都の制度として）認めさせることも。ただし、補助率2/3では高率だろう。

●くまき美奈子氏：親子だけだと共に倒れてしまう。そんな時に、放課後グループが子どもや親にとってどれだけ救いになっているかがよくわかった。力になっていかなければと思う。

●佐藤広典氏：利用者も困っている。職員も多大な負担。負担が大きければ続かない。サポートをしていきたいと考えている。

●かち佳代子氏：改めて放課後活動の重要性を学んだ。都も、この活動の必要性を認識しているはず。国の制度がどうなるか分からないあいだは、都が事業を

継続すべき。新規を認めないのは矛盾している。

●西崎光子氏：保護者のご苦労は胸に迫ってくる。昨年まで世田谷区議会議員。区・市議会議員がもっと勉強して、地域の中に提案していき、東京全体の格差の実態がないようにすることが重要。

活動報告（2007年10月～2008年1月）

- | | |
|----------------|---------------------------------|
| 10/18(木) | 事務局会議 |
| 10/22(月) | 緊急拡大定例会：「新しく補助金獲得をめざす緊急拡大定例会」 |
| 11/3(祝) | グループ連絡会学習会出席 |
| 11/15(木) | 事務局会議 |
| 11/19(月) | 定例会：施設紹介<つみき> |
| 11/23(祝)・24(土) | 全国学童保育研究集会出席 |
| 12/6(木) | 事務局会議 |
| 12/10(月) | 定例会：施設紹介<ゆめクラブ> |
| 12/13(木) | 民主党との懇談会出席 |
| 12/21(金) | きょうされん全国大会出席 |
| 12/26(水) | 事務局会議 |
| 1/17(木) | 事務局会議 |
| 1/27(日) | 都議会議員との懇談会
第10回研修会（角筈区民センター） |

※定例会議・事務局会議は、いずれも角筈区民センターで行なう。

第10回研修会（1月27日）報告

実践報告～「放課後ならではの実践を創る」

「放課後連・東京」では、午前中の「都議会厚生委員との懇談会」を終えたあと、同じく角筈区民センターにおいて、「第10回研修会」を行ないました。3名の参加がありました。今回は、実践的な力量を高め合うために、2名の指導員が実践報告を行なって、全体で検討しました。

●吉川和紀さん（清瀬市・わかば学童クラブ）

「先輩に囲まれて…」

小学1年でわかばに入所した恭介君。1年目はわかばがどんな所かわからず、うつむいて半泣き状態になったり、友だちを叩いたりした。そのため、恭介君の「叩く」という行為について指導員で話し合った。その結果、「不安感や警戒心があるからではないか。ゆったりと楽しめる環境作りをしよう」と考えた。

恭介君は、指導員との関係が深まるにつれて、自分からやりたいことを見つけてアピールしたり、自信がついたりしてきた。また、恭介君に叩かれた友だちとの関わりも少しずつでき上がった。あとから入所してきた同級生の雄飛君には、“先輩”として関わるようにもなった。

恭介君は、異年齢集団の中での4年間で、大きく成長した。

●芹澤健治さん（世田谷区・わんぱくクラブ）

「気持ちを切り替えるということ

～実との6年を振り返って」

小学6年でわんぱくに入会した実君。中学生から学校が替わったストレスもあってか、わんぱくでも活動場面が変わる時に気持ちの切り替えが上手くできず、ひっかく・つねる・ツバ吐きなどが激しかった。指導員は、「いつかは変わる」という信頼感を持って根気よく関わった。先の見通しが持てるような声かけをしたり、一緒に準備をすることで次の活動に気持ちを向けさせたりした。

指導員との信頼関係ができ、“嵐”のような1年を乗り越えてからは、友だちとの関わりで自分をコントロールして気持ちに折り合いをつけたり、班長になって仕事をうれしそうに行なったりする姿が見られるようになった。

「このまま落ち着いて楽しく過ごしてほしい」という実君の母親の言葉が、彼の成長をうかがわせた。

荒井聡氏からの助言

助言者の荒井聡氏（豊島区発達相談員）からは、次のような助言がありました。

今回のケースは年齢が全く違うが、両者とも集団との関わりがどう作られてきたかを考えると、よく似ている。最初は、ギクシャクしながら指導員との関係を土台として築いてきた。そして、関わってくれる先輩の存在を受けとめ、そのうちに同年齢の子との対等な関係ができ、やがて集団の中で先輩・班長などの役割を持つというように変わってきている。単に関係が広がっているだけでなく、集団の中での役割を理解している。

ポイントは、指導員としてどういった関わり方をしたから変化があったのかということ。単なる1対1での関係でなく、指導員集団としてどう関わってきたのか。どういう理念に基づいてやってきたのか。そうしたことを、もう一度見直してみるとよい。

また、放課後をどう捉えるかが大事。家庭や学校の補完ではなく、第3の場として違う機能を持つ、対等な欠くべからざる場だ。学校教育は、子どもの自主性を引き出して、学び合う場。放課後は、子どもたち自身が切り開いて、自己を実現する場。「この子にとっての自己実現とは何か」ということを、指導員集団として考えて関わるのだから、ある意味では学校教育よりも難しい。

社会性や感情面の発達については、学問的にもまだ確立されていない分野。実践の中から手探りしていく最先端の分野なので頑張してほしい。